http://aosa-eye.org

アフリカ眼科医療を支援する会

Association for Ophthalmic Support in Africa（ＡＯＳＡ）

2021 年活動報告（2021 年４月～2022 年３月）

No. 14

2022 年 4 月発行

（ペンバにて内藤　毅撮影）

アフリカ眼科医療を支援する会

〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町 3 丁目 18-15　　徳島大学医学部眼科学分野内

TEL：088-633-7163,　FAX：088-631-4848

〒951-8510 新潟県新潟市中央区旭町通一番町 757 番地　新潟大学医学部眼科学講座内

TEL：025-227-2296,　FAX：025-227-0785

Ⅰ．巻頭言 ……内藤　毅３
Ⅱ．活動の現場から ……４
2021年モザンビーク眼科医療支援 …… 内藤　毅４
2021年現地報告 ……宝山晶子４
コロナ禍のモザンビーク ……長澤利彦５
近況報告 ……沼田美紀５
今年は行きたい！…… 井口博之６
Ⅲ．2021 年度事業報告 ……６
Ⅳ．2021 年度会計報告 ……７
Ⅴ．2022 年度事業計画 ……８
Ⅵ．2022 年度予算 ……９
Ⅶ．活動資金・物品提供者名簿 ……10
Ⅷ．「アフリカ眼科医療を支援する会」定款 ……11

（2019 年のアイキャンプ終了時の記念写真、シャイシャイにて）

Ⅰ．巻頭言

長引くコロナ禍の中での活動

AOSA 理事長
徳島大学大学院医歯薬学研究部特命教授
内藤　毅

2008 年にモザンビーク共和国（以下モザンビーク）への眼科医療協力を第一の目的として、アフリカ眼科医療を支援する会（AOSA）を設立し、現在まで毎年現地で医療活動（アイキャンプ）を行ってきました。しかし 2020 年からはコロナ禍のため現地でのアイキャンプを行うことは不可能で、コロナ禍の収束を待つしかありません。さらに次々と出現する変異株も収束を困難な状況にしています。

コロナ禍の中で国際医療協力をどのように継続するかは非常に困難な問題で、国際協力を行なっている団体は活動の継続方法を模索しています。特に現地への渡航が困難となり、現場での医療支援が制限される点が最も困難な点となっています。モザンビークなどの発展途上国では医療体制が脆弱で、現地での技術移転が極めて重要です。リモートでの技術指導も試みられていますが困難です。

幸いなことに我々が継続して技術指導し、手術技術を習得した眼科医がシャイシャイ病院に赴任して白内障手術を積極的に行っているのは現地の医療状況の改善に大きな力となると思います。しかし、モザンビークの経済状況の悪化による医療物資の不足は彼らの活動にとって一番の障壁の様に思われます。さらにコロナ禍のため物流が滞り悪影響が出ています。アイキャンプの折には残った物資を現地に残して、彼らの活動に役立てばと思っていますが、微々たるものです。眼科医が徐々に増えてきていますが、経済状態は依然として厳しい状況です。

コロナ禍で国際協力の活動が制約される中、現地の人々も日本からの援助に頼らない自立した活動を模索しています。モザンビークでも我々が指導して来た眼科医が指導者となり、独自に活動を計画するようになって来ました。さらに世代交代によりこの傾向は良い方向に発展しているように思えます。

我々の目的はモザンビークの眼科医の医療技術が向上し、独自にアイキャンプなどの僻地医療を行う事が出来るようになり、モザンビークの眼科医療が少しでも改善することです。医療物資の不足に関しては我々の力ではなかなか困難ですが、さらに現地の方々と相談して物資の確保に努力したいと考えています。

モザンビークの現地事情により、我々の活動は決定されますが、慎重に状況を見ながら、安全に活動を継続できたらと考えています。新型コロナウイルス感染症の早期の収束を祈りながら、日本の代表の一人として微力ながら国際貢献を継続する所存ですので、今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（シャイシャイ病院で活躍するモイゼス先生）

（次世代を担うモザンビーク人眼科医たち）

Ⅱ．活動の現場から

2021 年モザンビーク眼科医療支援

徳島大学　内藤　毅

新型コロナウイルス感染症パンデミック（コロナ禍）が予想以上に長引いている。感染症法における分類で二類からインフルエンザと同じ五類に変更されて、日常の生活がコロナ禍以前に戻るのではないかと思っていたがまだ変更されない。

本来なら2021年のモザンビークアイキャンプも例年と同じように6月にシャイシャイで行う予定で進めていた。しかしコロナ禍のためアイキャンプは延期となった。

常にモザンビーク現地在住の日本人コーディネーターと連絡を密に取り、現地の状況の情報収集を行なって来た。現地ではコロナワクチンの接種が進んでいるが十分に行き渡っていないと思われるが、徐々に接種率はかなり改善され高くなっている。報告される感染者数は人口の割には多くはなく、状況が充分に把握できているかは不明である。得られる情報も限られており、状況を慎重に把握する必要がある。現地日本大使館から発せられる情報が最も信頼できると思われるので定期的に情報を収集している。

モザンビークではコロナ禍のため、現地の眼科医による白内障手術件数が例年の半数以下に減少したとの報告があり、現地の状況に関して情報を共有しながら現地の眼科医の活動支援を検討した。特に、医療資材不足は経済が不安定なため困難な状況となっており、現地の眼科医から医療資材の提供の可能性を打診された。モザンビークへの医療資材の輸送を試みたが、現時点ではモザンビークへの物資の輸送は不可能に近い。国際郵便等の郵送体制が再開するのを待っているが早期の回復は期待出来ない。今後の現地支援方法やコロナ禍収束後の活動計画を検討中である。

また、活動再開に備えて、白内障手術機材等の備蓄状況を確認・検討し、アイキャンプができる状況になれば活動開始できるように準備した。手術器具は消耗品であり経年変化してきたので、白内障手術器具２セットを購入した。

さらに、現地での指導者も世代交代しつつある。我々のアイキャンプに参加して技術指導を受けた眼科医が指導者の立場へと成長し、現地での活動計画を積極的に立てている。彼らから現地での医療活動の要請があり、医療活動申請を早目に申請して欲しいとの要請があったので、早速申請に取り掛かった。やる気のある現地の眼科医たちから要請があるので、今年こそは現地で活動を再開できたらと願っている。

コロナ禍で国内にこんなに長くいたことがなく、時間的に余裕ができたので、自分自身の白内障手術を受けた。視力はそれほど悪くなかったがコントラストが低下したため手術をしてもらった。手術後の見え方の改善は素晴らしく、見えることの重要さを自分が患者の身になって改めて実感した。現地の患者さんのように進行した白内障の場合、手術後に眼帯をとった時に、自分で再び歩けるようになり、嬉しさのあまり踊り出す患者さんがいることが十分納得できた。

現地の状況を把握しながら、活動を再開しようと準備していますので今後ともご指導、ご支援の程よろしくお願いいたします。

2021 年現地報告

モザンビーク　宝山　晶子

2022 年が明けた。温暖化の影響で、海水温が高くなり、インド洋上では次々に大型のサイクロンが発生している。モーリシャス、マダガスカル、モザンビークの順に暴風雨の影響を受け、多数の死者、数多くの家屋をはじめ道路や橋などインフラの倒壊が目立っている。数年前までは、サイクロンがくるといっても、だれもが鼻歌気分だったが、今は恐怖と心配で夜も寝られないありさまだ。

加えて、オミクロン株の出現で、南アフリカを中心に感染者が目立っていたが、2 月にはいり落ち着き、モザンビークでは毎日 60 人前後の感染者、死者は１名前後にとどまっている。もし、コロナにかかれば、通常マラリア薬が処方され、どこの薬局でも処方箋をもっていけば買える。だが、南アフリカの主要都市は主に標高１４００ｍ前後の高山地帯にあり、マラリア地帯ではないため、コロナ発生当初から、アフリカ大陸でも突出して感染者が多かった。モザンビークはたくさんの鉱山労働者を南アに送っており、彼らが南アで感染し、モザンビークに持ち込むケースが多い。

モザンビークを最も悩ませているのが、テロとの戦いだ。北部のインド洋上には、世界最大級の天然ガスの埋蔵が確認されており、各国の天然ガス開発大手がモザンビーク政府から権益を取得し、採掘に乗り出そうとしている。そんな中、イスラム国（IS）のテロリストが同地域に侵入し、ゲリラ戦を展開し、斬首など残酷な方法で住民や関係者を恐怖に陥れてきた。すでに 1000 人以上がテロの犠牲になっている。モザンビーク国軍だけでは、太刀打ちできないため、アフリカ南部諸国に軍の派兵を要請し、各国がそれに応えようとしている。だが IS はゲリラ戦のいわばプロであり、膠着状態が続いている。先日、ベイラ市長が私どもの学校を訪問された際、北部のテロ問題について聞いてみたところ、世界で天然ガス産出国を増やしたくないと考えるある国が、IS を使って阻止しようとしている、と答えられた。

その国とは、ロシアなのか、それともイランなのか。
中国の一帯一路政策は、確実にモザンビークに浸透している。小さくて薄汚かった外務省はじめ政府の建物は、中国が次々に建設し、モダンな大型ホテルのように生まれ変わった。さらに首都の空港建設や首都から対岸にかかるアフリカ一の高さを誇るつり橋の建設等々、国民に中国の威力と技術力をアピールするのは十分であった。アジア太平洋諸国と同様、モザンビークも中国の債務の罠に陥らなければよいが。債務返済に困り、良港のマプト港、ベイラ港、ナカラ港、ペンバ港の権益を引き渡さざるを得無くなる、といった事態にならなければいいが。
もちろん、コロナワクチンも中国のシノファーム社製だった。副反応はなにもなかった。ファイザー製など欧米諸国が開発したワクチンを打ちたければ、南アにいくしかない。
2020 年と 2021 年、コロナのために、白内障手術プロジェクトは中断せざるを得なかった。今年はどうか。保健省は日本の眼科医一行にぜひきてほしいと願っている。

コロナ禍のモザンビーク

ツカザキ病院　長澤　利彦

この原稿を書いている 2022 年 1 月 6 日時点のモザンビークの報告によると COVID-19 感染者 203,241 人、死者 2,065 人(日本 18,396 人)が報告されており、ワクチン接種完了者は 42%(同時期日本 78.5%)とのことである。報道ベースによるワクチンの内訳は中国のシノファーム５５％、イギリスのアストロジェネカ１８％、アメリカのジョンソン&ジョンソン２７％となっておりモザンビークと交流のある国が圧倒的に中国であることが示唆されるデータとなっている。
2020 年のモザンビークの経済状況をみると、コロナ禍以前の GDP 成長率は 4.3%と見積もられていたが、国内外の需要の低下、感染症対策による供給網の寸断、液化天然ガス開発の遅れといった影響を受け、成長率は 1.3%に下方修正されている。(World Bank 2021)　日本同様にコロナ禍では飲食店の営業時間や酒類の提供が規制されているのだが、日本と違い規制に違反すれば、1500 メティカル（2000 円相当）の罰金に加え、しばしば賄賂を要求される場合もある。モザンビークを訪れて印象的な風景は露天商の多さである。しかし、規制を守らない店舗の中には警察のみならず国家警察に属する機動隊を出動させ、催涙ガスとゴム弾を使用して露天商を退去させるという日本では考えられない現実もある。参入障壁の低い露天商の多くは貧困層の生存維持のための手段となっているが、コロナ禍の規制で生計活動が大幅に制約を受け、困窮の度合いを増していることが如実に現れているとのことである。
（https://www.jstage.jst.go.jp/article/africa report/59/0/59_72/_pdf/-char/ja）
我々の活動も完全に現在は遮断されている。無理をすれば海外医療活動も不可能ではない。日本の海外医療活動“ジャパンハート”の代表吉岡秀人先生はこの最中でも果敢に海外医療支援活動をされている。しかし、ボランティアであるとはいえ国境を移動した際のホテルでの一定期間の不自由な生活を「あとせいぜい 30 年足らずの大切な自分の限られた寿命の一部を、こんな軟禁生活のために差し出さないといけないのだろうか？」と自問自答する日々が続いているとのことである。
アドラーの心理学によると自分でコントロールできないことをどうにかしようとしても、意味はないので、気にしても無駄であるという。現状もそうなのだと考えてアタフタせず、ただ嵐が止むのを待つ日々が続いている。

近況報告

山王台病院眼科・内科クリニック
看護師 沼田　美紀

モザンビークに行くことができなくなって3年目。次に行った時はこうしてみようと思っていたことを実現できるのはいつになるのか、間が空きすぎると次の活動の時にいろいろ忘れてしまって動けないのではないかと日々考えています。
仕事上はコロナにいまだに振り回されている状況です。どこでも同じだと思いますが、余裕があるわけではない人数で業務をこなしています。その状況でコロナ対応のために今までとは違う業務や増えた業務が日々を圧迫してきています。
まず、検温やマスク装着の声かけのために常に 1 人施設の入口で待機。ワクチン接種の為に別な部署での勤務。入院前の検査や問診、陽性時の対応などに時間も人手も取られています。準備や書類、説明しないといけない事も増えました。さらにはスタッフの急な休み(陽性者や濃厚接触者)にも対応していると、通常の業務がかなり厳しい状況です。いつまで振り回されるのかとつい思ってしまいます。
仕事以外は外出制限や移動制限のため自宅で過ごす時間が増えました。自宅では猫たちに気が向いた時に相手をしてもらっています。自由に過ごす猫たちの気まぐれな要求に人間があわせていますが、振り回されてこそ猫と思っています。気付くと一緒に寝ていたり、コタツを占領していたり、オカズを奪われたりと日々の平和な我が家の話題になっています。手の届くところに誰かしらいるので撫でたい時は好きに触って毛皮を堪能しています。自宅時間が増えたので、猫たちが爪とぎをしてしまった壁紙を剥がして漆喰を塗り始めました。少しずつしか

やらないのでなかなか進みませんが、綺麗になっていくのを見るのは気分が良いです。

今は自分ができることをしていこうと思っています。体力がないのでつけたいのですがこれが結構難しく、落とさないようにするのがやっとです。本当はジリジリ落ちている気もします。モザンビークまで行くのには必要なのでなんとかしたいです。

近いうちにまたモザンビークに行けることを願っています。一緒に活動を続けてきた皆様と無事に会えますように。応援してくださっている方々も健康でありますように。

今年は行きたい！

井口　博之

コロナ禍のため現地での医療活動が２年連続で出来なくなってしまった。今までモザンビークで多数のアイキャンプに参加してきたが、２年連続で中止となったのは初めてである。長年、現地での活動をお手伝いしてきて、現地の方々とも知り合いになった。現地の方々の喜ぶ顔を見るのは大変うれしいことで、アイキャンプを続ける意義でもある。医療サービの行き届かないモザンビークではコロナ禍の状況も厳しいと想像している。しかも、目の見えない患者さんたちはさらに厳しい状況になっているのではないかと心配している。恐らくたくさんの患者さんが待っていることであろう。手術後に喜ぶ顔を見るのは大変うれしいことで、早く活動が再開できることを願っている。

現地での活動が出来ないので、時間があるときに知人に AOSA の活動を紹介し、ご協力をお願いしている。コロナ禍収束後の活動再開の準備をしておくことは大切であり、今後も AOSA の活動に協力していきたいのでご支援よろしくお願いします。

＊＊

Ⅲ．2021 年度事業報告

“アフリカ眼科医療を支援する会”
モザンビーク眼科医療支援 2021

（１）事業実施状況

2008 年からの 12 回の現地医療支援プロジェクトの成果をもとに 2021 年も例年と同様に６月７日から６月 16 日の旅行日程でシャイシャイで行う予定であった。しかし新型コロナウイルス感染症パンデミックが収束しないため中止となった。

（２）事業計画中に生じた課題等と対処内容

①　2021 年は活動を早期の段階で中止していて航空券の購入等も行っていなかったので問題はなかった。

②　今までに現地へ送った医療物資は現地在住の日本人コーディネーターの自宅で保管中であり、丁寧に管理されている。しかし経年変化や、使用期限の制約もあり、見直しが必要である。白内障手術器具は経年変化で補充の必要な物品が出てきたので、白内障手術器具を２セット購入した。

③　モザンビークへ向けての郵便小包（船便）は現時点で利用できないままである。次回のアイキャンプの時には大量の物資を携行する必要があると思われるので、すでに物品リスト等を準備中である。手荷物超過料金も高額となるので、準備を入念に行っている。

（３）事業の成果

我々が技術指導してきたモザンビーク人眼科医が指導者的立場となり、独自に事業計画を立てつつある。また、シャイシャイ病院に赴任した眼科医は、独自に白内障手術を行っている。アイキャンプが出来なくても彼の努力で成果があがりつつある。また彼らが独自にアイキャンプを計画し実行に移そうとしている。

コロナ禍で物資不足が深刻で、アイキャンプの際に我々が現地に残してきた医療物資も消耗し、現地での医療物資の不足が問題となっている。この点に関しても彼らだけで問題を解決しようと努力している。今後現地の方々と検討し医療物資の調達方法を模索する。

（４）広報活動など

①当会のホームページを更新した。さらに動画(YouTube)なども更新し、世界に向けて発信しつつ、充実したものに改善した。(http://aosa-eye.org)

②我々の活動を広く理解して頂くために、広報活動を行った。2022 年２月、内藤が写真展「Shining Eyes 瞳輝く子どもたち」を企画したがコロナ禍のため 6 月に延期となっている。

Ⅳ. 2021 年度会計報告

収入の部

１．寄附金	1,022,623
２．助成金＊	550,000
３．繰越金	2,614,028
４．利息	17
計	4,186,668 円

＊ 助成金内訳

徳島プリンスロータリークラブ	300,000
徳島新聞社会文化事業団	50,000
徳島県眼科医会	100,000
徳島大学眼科同窓会（黒瞳会）	100,000
計	550,000 円

支出の部

支出項目

１．モザンビーク眼科医療支援プロジェクト	
白内障手術器具・医薬品等	607,816
計	607,816 円
２．その他	
日本眼科国際医療協力会議会費	50,440
印刷代（会報など）	130,440
送料	36,360
計	217,240 円

総支出合計	825,056 円
次年度繰越金	3,361,612 円
計	4,186,668 円

Ⅴ．2022 年度事業計画
（2022 年４月１日～2023 年３月 31 日）

“アフリカ眼科医療を支援する会”
第 13 回支援プロジェクト
モザンビーク眼科医療支援 2022

１．事業の趣旨及び目的

過去 12 回の支援プロジェクト結果をもとに第 13 回支援プロジェクトを計画した。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行の収束を見極めて行動する予定である。

① モザンビークで日本人医師による白内障手術を行うことにより、白内障による失明患者の軽減に貢献する。失明者は貧困に拍車をかけているため、手術によって視力を回復した人たちは労働力となり、貧困の改善に寄与することになる。

② 人口約 3,000 万人に対し、眼科医は約 20 名にすぎず、危機的状況である。過去にアイキャンプで技術指導した眼科医がシャイシャイ病院に就職している。彼の技術の上達状況を確認し、彼が独自に発展的に活躍出来るようにバックアップしたい。さらに、現地の眼科専門課程研修希望者への技術指導、奨学金等の資金的援助を検討し、モザンビーク人眼科医の育成を支援する。現地の方々と相談し技術支援する方針である。

③ モザンビークでは大部分の医師は都市に偏在し、特に周辺地方では、病院に行く機会に恵まれず、病気に関する知識に乏しい。病気に罹患しても約６割の住民は祈祷師に頼る。多数例の白内障手術を行うことにより、医療従事者の研修および地域住民に正しい医学情報を伝えることができる。

２.事業の内容

過去の活動と同様に、「モザンビーク共和国保健省」と「アフリカ眼科医療を支援する会」との共催でプロジェクトを行う。「モザンビーク共和国保健省」は、眼科医療支援活動を行う病院を指定し、現地医師、看護師、眼科助手などの病院スタッフを動員し、我々 NGO のスタッフと協力して患者治療にあたる。「アフリカ眼科医療を支援する会」は、眼科医師、看護師など眼科医療の専門家を現地に派遣し手術を行う。また手術用顕微鏡、手術器具、眼内レンズなどの医療機器、医療材料や医薬品を提供する。

コロナ禍のため現地でのアイキャンプが出来ない場合、マプト中央病院での技術指導も検討している。

本プロジェクトは、「在日モザンビーク共和国大使館」、「在モザンビーク日本大使館」、「徳島大学医学部眼科学分野」、「新潟大学医学部眼科学講座」および現地で活動を行っている NGO「モザンビークの学校を支援する会」より支援・協力を受けている。

① “アフリカ眼科医療を支援する会” 第 13 回支援プロジェクト

既にモザンビーク保健省からは首都マプトから近い場所での活動要請があった。要請に従って 2022 年 10 月、第 13 回眼科医療支援活動（アイキャンプ活動）を計画中である。今後の活動は新型コロナウイルス感染症流行の収束状況によって決定される。現地に１週間滞在し、白内障による失明患者約２００名の手術施行を目標としている。今回も前回と同様に、日本人眼科医４名に加えて、我々が指導してきたモザンビーク人眼科医 1 名および眼科専門課程で研修中のモザンビーク人眼科医師２名と共に手術を行い、モザンビーク人医師への手術教育を行う予定である。手術用顕微鏡、オートレフケラトメーター、眼軸長測定器をフルに使用してより質の高い手術を行う予定である。

2021 年度は現地でのアイキャンプは実施できなかった。本年も困難なことが予測される。アイキャンプでは多数の患者さんが押し寄せるためどうしてもソーシャルディスタンスの確保が困難となる。現地でのコロナワクチンの接種状況、コロナ禍の収束状況を現地保健省と検討しながら現地での活動を決定する予定である。

② 眼科専門課程研修希望者の支援

モザンビーク人眼科医の育成が急務であり、この点をモザンビークの関係者に説明しているが、保健省の政策では眼科専門課程の定員は年間1－2名のみである。根本的に医師数が限られているので、問題解決には時間を要する。長期的視野に立ち現地で指導するとともに、関係者とともに教育体制を改善するために意見交換をしている。国立エドアルド・モンドラーネ大学医学部眼科教授兼マプト中央病院眼科部長でモザンビーク眼科医のリーダーであるマリアーモ女史と協議し、毎年２名の専門課程研修医師をアイキャンプへ招待し技術指導を行なっている。コロナ禍のためアイキャンプを実行できない場合、マプト中央病院での技術指導を考えている。

３．現地支援活動計画

2020 年以降、新型コロナウイルス感染症流行によりアイキャンプは延期となった。新たな日程は未定であるが、現地からの要望に従い計画中である。現地からは 2022 年 10 月に支援活動の再開の依頼が来ている。現地の医師の意欲を尊重して支援する予定である。

４．事業の長期展望

（１）現地の協力

根本的な医師不足のため、特に地方においては病気に罹患しても、大多数の住民は祈祷師による伝統的治療を受けている。我々の眼科医療支援活動により、地域住民および医療従事者に眼科医療に関して啓蒙することが出来ると考えている。実際に多数例の白内障手術を行って失明患者を救済することで、地域住民および医療従事者に眼科医療の重要性を理解してもらうことが出来るようになってきた。

さらにモザンビークの眼科医療体制の根本的な改善には、眼科専門医の育成が不可欠である。眼科専門課程研修希望者を対象に、長期的な視野でモザンビーク人眼科医の育成を支援する必要がある。このためには大学での手術教育の改善強化を試みる必要がある。

これらの目的を達成するためには、モザンビーク共和国保健省を軸に、モザンビーク人眼科医をはじめ関係者と連絡を密にし、協力体制を強化する必要があり、引き続き連携していく予定である。コロナ禍のため困難な状況であるが、現地と相談しながら継続して行く。

（２）将来展望と資金計画

アイキャンプを継続して行うことで、モザンビーク保健省との信頼関係がより強固なものとなって来た。コロナ禍の状況で活動が休止状態であるが、今後現地の意見を聞きながらさらに発展させて行く必要がある。

モザンビーク人眼科医の養成に加え、教育システムと診療体制の強化、さらには総合的にシステムを見直し、インフラの整備が目標となる。特にモザンビークにおける医療機器の管理体制を強化する必要がある。これらの計画の主役はモザンビークの人たちであり、彼らとの話し合いにより計画の細部を決定していく。将来的には徳島大学と現地大学との大学間協定締結やJICAプロジェクト等への申請も考慮していく。また草の根無償資金協力等の資金獲得も計画していく。

広報活動など

我々の活動を理解して頂くために昨年度と同様に積極的に広報活動を行った上で、寄附等を要請していく予定である。

①ホームページの充実

広報活動にホームページは不可欠であるため、今年度はさらにホームページを徐々に充実させる予定である。また動画サイトへの投稿なども積極的に行って来たがさらに充実させる予定である。

②眼科学会等での発表

眼科関連学会等のインストラクションコース等で発表予定である。

Ⅵ. 2022 年度予算

収入の部

寄附金	1,000,000
助成金	300,000
繰越金	3,360,000
合計	**4,660,000 円**

支出の部

1. モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

白内障手術器具等	400,000
医薬品等	300,000
渡航費補助	200,000
現地移動費等	200,000
現地滞在費等	500,000
雑費	150,000
小計	1,750,000

2. その他

印刷費	250,000
通信費	100,000
雑費	200,000
予備費	2,360,000
小計	2,910,000
合計	**4,660,000 円**

Ⅶ. 活動資金・物品提供者名簿

（2021 年４月１日～2022 年３月 31 日、順不同、敬称略）
たくさんのご寄附ありがとうございました。
お礼申し上げますとともに、ここにご紹介させていただきます。

（徳島県）
糸田川　誠也、井上　須美子、井上　昌幸、
猪本　康代、大村　和正、賀島　誠、香留　崇、
金川　知子、兼松　誠二、鎌田　泰夫、川端　昌子、
木下　導代、工藤　英治、篠賀　健、篠賀　知代、
塩田　洋、島　裕美、髙橋　順子、武田　美佐、
竹林　優、多田　糸図、谷　貴美子、谷口　冨志子、
豊永　寛二、内藤　毅、中西　淑子、仁田　美智子、
秦　聡、秦　裕子、藤井　邦隆、牧野谷　卓宏、
松本　治恵、三河　洋一、水井　研治、美馬　彩、
盛　隆興、山田　修三、吉浪　弘子、吉村　久
黒瞳会、コンセール合唱団、徳島県眼科医会、
徳島新聞社会文化事業団、
徳島プリンスロータリークラブ

（香川県）
赤澤　嘉彦、大豆本　恵里奈、川口　みさ子、
小木曽　正博、坂口　恭久、谷　英紀、
早馬　由美子、平井　健一、松村　香代子、三崎　昌史、湊　真奈、吉田　慎一

（高知県）
内田　佳永、田内　芳仁、林　勇樹、山中　清香

（愛媛県）
木内　康仁

（兵庫県）
馬詰　裕道、長澤　利彦、野口　三太朗
ツカザキ病院

（大阪府）
井口　絹江、井口　博之、大中　信行、森　菊枝、
山本　幸子、吉田　恭子

（滋賀県）
尾崎　志郎

（新潟県）
阿部　春樹、荒井　紳一

（東京都）
社本　真紀、中屋　由美子

（千葉県）
竹林　宏

（茨城県）
沼田　美紀

（北海道）
石丸　裕晃

（鹿児島県）
田上　純真

（モザンビーク共和国）
宝山　晶子

（企業など）
（株）アーガス・ビー・エム・シー、
エイエムオー・ジャパン(株)、
（株）エムイーテクニカ、（株）オーヒラ、
参天製薬(株)、日本アルコン（株）、
（有）山口メディカル、
(株)リブドゥコーポレーション

（寄付していただいた医療器材等、2019 年）

アフリカ眼科医療を支援する会　定款

第１章　総則

名称

第1条　このNGO（民間非政府組織）は、名称を“アフリカ眼科医療を支援する会”とする。

第2条　英語名をAssociation for Ophthalmic Support in Africa (AOSA)とする。

事務所所在地

第3条　このNGOは、主たる事務所を下記に置く。

徳島事務所：徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15
徳島大学医学部眼科学分野内

新潟事務所：新潟県新潟市中央区旭町通一番町757番地
新潟大学医学部眼科学講座内

第２章　目的および事業

第4条　このNGOは、眼科海外医療協力を行い、主としてアフリカ諸国の眼科医療の発展を支援し、アフリカ諸国の人々を失明の危機から救うことを目的とする。具体的には、眼科医師等のスタッフを現地に派遣して医療活動を現地で行い貧困のために治療を受けられない人々に対する眼科医療支援を行うこと､および現地の医療スタッフに対する眼科医療の技術向上のための教育を行うことをNGO設立当初の目的とする。

第５条　このNGO設立当初は、モザンビーク共和国を医療支援の対象とするが、人道的見地から活動は全世界にわたる。

第３章　会員

第６条　会員の種別

・正会員　このNGOの目的に賛同して入会した個人および団体
・賛助会員　同会設立目的への賛同者

第７条　入会金　入会金はとくになし

第８条　年会費　このNGOの設立当初の会費は、次に掲げる額とする

・個人　年会費　　１万円
・団体　年会費　　５万円

第９条　入会、退会については自由とする。ただし、正会員は役職につけば、相応の理由がない限り、職務を全うすること。

第４章　役員および選任等

第10条　このNGOに以下の役員を置く。

理事２名以上１０名以内、顧問２名以上６名以内
理事のうち、１名を理事長、１名を副理事長とする。

第11条　理事は正会員の中から選出する。

理事長・副理事長は、理事の互選とする。

第12条　理事が会計を兼務することは可能とする。

不正など、背任行為があった場合は、除名とする。

第５章　総会

第13条　このNGOの総会は、正会員をもって構成する。

第14条　通常総会は、毎年１回開催する。

第15条　総会は、以下の事項について議決する。

１）定款の変更
２）事業報告および収支決算の承認
３）その他運営に関する重要事項

第６章　会計

第１６条　会計報告は、年一回収支決算報告書としてまとめる。元帳、領収証は別に保管する。

第１７条　会計年度は、４月１日から翌年の３月３１日までとする。

第７章　雑則

第１８条　このNGOの役員は、次に掲げる者とする。

理事長　：内藤　毅　　徳島大学大学院医歯薬学研究部特命教授
副理事長：荒井紳一　　あらい眼科院長、新潟大学医学部眼科非常勤講師
理　事　：井口博之　　東淀鋼材（株）会長
理　事　：長澤利彦　　ツカザキ病院
理　事　：沼田美紀　　山王台病院付属内科・眼科クリニック
顧　問　：阿部春樹　　新潟大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：塩田　洋　　徳島大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：福地健郎　　新潟大学医学部眼科教授
顧　問　：三田村佳典　徳島大学医学部眼科教授

（敬称略：50音順）

第１９条　この定款は2015年4月１日、一部訂正し、これを施行する

（アイキャンプのスタッフたちと記念撮影、2019年）